

# PET ボトルリサイクルポリエステル繊維に対する 学生の意識とその利用の実態

高 森 壽

## Student Awareness and Usage of Polyethylene terephthalate textile Products regenerated from PET bottles

Hisa TAKAMORI

(RECEIVED OCTOBER 2, 2006)

We conducted a written questionnaire to examine 1) the awareness of students on the recycling of PET bottles and polyethylene terephthalate textile products regenerated from PET bottles, and 2) their level of use of polyethylene terephthalate textile products regenerated from PET bottles. Our survey targeted male and female university students attending the Kumamoto University and universities located in Osaka. We analyzed their responses, and the results of the analysis are as follows.

- (1). Almost all students were aware of the fact that PET bottles are recycled.
- (2). In response to a question on PET bottles being recycled as a form of polyethylene terephthalate textile, less than half of the students (173 students, 41.5%) answered, "I know this, and I have seen such products." When the Kumamoto students were compared with the Osaka students, it was found that the Kumamoto students had a higher level of awareness.
- (3). In response to the question on polyethylene terephthalate textile products regenerated from PET bottles being used as clothing, we found that over 90% of the respondents answered, "I think that is really good," or, "I think that is pretty good." However, when asked further about their intention to buy such clothing, less than 70% answered either, "I would like to purchase," or, I might consider purchasing. Furthermore, approximately 80% of the respondents (323 students, 77.5%) answered, "I have never purchased nor tried on]" clothing made from polyethylene terephthalate textile products regenerated from PET bottles. When considering these results, it appears that there is a large gap between students' awareness of polyethylene terephthalate textile products regenerated from PET bottles and their actual use of such products.

**Key words :** male and female university students, polyethylene terephthalate textile products regenerated from PET bottles, awareness and usage

### 1. 緒 言

二酸化炭素の増加, 温室効果ガスと呼ばれるメタン, フロン等が原因で起こる地球温暖化問題に関しては1997年12月に, 気候変動枠組み条約第三回締約国会議(温暖化防止京都会議)が京都で開催され, 温暖化防止のための二酸化炭素ガス(CO<sup>2</sup>)など, 法的拘束力をもつ温室効果ガスの排出削減目標が決められた<sup>1)</sup>. 一方, 廃棄物の問題に関しては, 廃棄物の処理について国際的な規制の強化も進められており<sup>2)</sup>, 日本においても廃棄物の増大に対する具体的な施策として, 1991年に「再生資源の利用の促進に関する法律」(再生資源利用促進法)の施行<sup>3)</sup>, 1992年に「廃棄物の処理および清掃に関する法律」(廃棄物処理法)の改

正<sup>4)</sup>, 1993年には, 「エネルギー等の使用の合理化および再生資源の利用に関する事業活動の促進に関する臨時措置法」(省エネ・リサイクル支援法)の制定が行われた<sup>3)</sup>. さらに, 1995年には新たに「容器包装に係る分別収集および再商品化の促進等に関する法律」(容器包装リサイクル法)が制定<sup>5)</sup>された. 容器包装のなかでPETボトル及びガラスびんは1997年4月に施行された「容器包装リサイクル法」により特定容器の指定を受け, 大企業を対象に再商品化が義務付けられることとなった. 2000年4月から「容器包装リサイクル法」が完全施行されて今日に至っている.

再生PETは, 繊維, シート, ボトル, 成型品及びその他, さまざまな用途に利用されているが, 繊維への用途が最も多く, 2004年度実績再生PET樹脂の約半

数を占めており<sup>6)</sup>、実際にリサイクルポリエステル繊維として、カーペット、毛布、学生服をはじめとする団体の制服、カーテン、シャツなどに製品化され、販売されている。それら繊維製品の主な販路は、主として官庁・自治体、流通業界などが多い。

本田<sup>7)</sup>はPETボトルが、「容器包装リサイクル法」により特定容器の指定を受けた1997年に、熊本市に所在する大学の男女学生1,136名を対象としてPETボトルリサイクルポリエステル繊維に対する大学生の意識とその利用の実態について調査し、PETボトルリサイクルポリエステル繊維の認知度と利用度はきわめて低いことを明らかにした。その理由としてはPETボトルリサイクルポリエステル繊維製品が市場に出回り始めて日が浅かったことも一因と考えられた。そこで、「容器包装リサイクル法」完全実施より5年が経過し、PETボトルのリサイクル技術も格段に向上した2005年に、熊本大学に在籍する男女大学生を対象として、改めて同様の調査を実施し、PETボトルリサイクル繊維に対する大学生の意識とその利用の実態について分析した。また、今回は大阪の学生についても調査を実施し、地域差についても分析した。その結果2,3の知見を得たので報告する。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象、調査時期及び調査方法

調査は熊本大学（以下熊本と略す）及び大阪府下に所在する大学（以下大阪と略す）の男女学生を対象に2005年7月に、集合調査による質問紙調査法により実施した。回収数は478（熊本189、大阪289）、回収率は100%であった。そのうち回答に不備な箇所が多くみられた調査票を除いた結果、有効回収数417（熊本男子83、女子103、計186、大阪男子193、女子38、計231）、有効回収率87.2%となった。

### 2.2 調査内容及び分析方法

アンケート調査の内容は先に本田が実施した調査<sup>7)</sup>を参考として設定した。主な調査内容は、1)「容器包装リサイクル法」の認知度、2)PETボトルのリサイクル及びPETボトルリサイクルポリエステル繊維製品についての認知度と意識、3)PETボトルリサイクルポリエステル繊維製品に対する印象である。

調査結果の分析は、社会情報サービス社エクセル統計2002を用いて行った。また分析にあたっては、男女の数が近い熊本学生を対象に、調査項目、(1)容器包装リサイクル法の認知度、(2)PETボトルがリサイクルされていることについて認知度、(3)PETボトルがポリエステル繊維にリサイクルされていることの

認知度、(4)リサイクルポリエステル繊維製品の購入経験と着用経験、(5)リサイクルポリエステル繊維製品が衣料用として使用されることについての可否等、計5項目について、クロス集計、 $\chi^2$ 検定を用いて男女差を検討した結果、どの項目においても有意な差は認められなかったため、結果の分析は男女を分けずに行った。

## 3. 結果及び考察

### 3.1 調査対象者の概要

#### 3.1.1 居住形態

調査対象者の居住形態を表1に示した。熊本では「下宿、アパート」に住む者が50%以上を占めたのに対し、大阪では「自宅」が最も多く80%以上であった。この結果は、大都市では交通網が発達しているため、かなり遠距離でも通学が可能であることを示している。

#### 3.1.2 関心のある地球環境問題

PETボトルのリサイクルは、現在重要な課題である省資源のための一方策であり、その実行には調査対象者の地球環境問題に対する意識が影響していると考え、表2に示す環境問題項目について3つまで選択してもらった。その結果を表2に示した。

表2に見るように1位は「地球の温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林など地球規模の環境問題」で314名(75.3%)であった。しかし、「資源、エネルギーの枯渇」に対する関心度は、全体では2位に順位付けられたにもかかわらずその割合は低く、144名(34.5%)にとどまった。地域別の傾向をみると「資源、エネルギーの枯渇」において、熊本学生の関心度は大阪学生の2倍強であり、「大気汚染、水質汚濁などの問題」では逆に大阪学生の関心度が高かった。

#### 3.1.3 「容器包装リサイクル法」の認知度

「容器包装リサイクル法」の認知度について、「名前も内容も知っている」「名前は聞いたことがあるが、内容までは知らない」「知らない」の3項目から回答を得た。その結果を表3に示した。

全体では、「名前は聞いたことがあるが内容まではわからない(45.3%)」が最も多く、次いで「知らない(40.8%)」であり、「名前も内容も知っている」者は僅か13.9%であった。この結果は熊本も大阪も同様の結果であった。「容器包装リサイクル法」完全実施より5年経過したにもかかわらず、「容器包装リサイクル法」の認知度は低く、今後、いっそうの啓発活動の必要性が示唆された。

表1 調査対象者の生活形態

生活形態	全体 n = 417	熊本 n = 186	大阪 n = 231
下宿・アパート	137(32.9%) <sup>a)</sup>	99(53.2%)	38(16.5%)
自宅	275(65.9)	82(44.1)	193(83.5)
その他	5( 1.2)	5( 2.7)	0( 0.0)

a) : ( ) 内は %, % の母数はそれぞれの n.

表2 関心のある地球環境問題

生活形態	全体 n = 417	熊本 n = 186	大阪 n = 231
地球温暖化など	314(75.3%) <sup>a)</sup>	148(79.6%)	166(71.9%)
資源・エネルギーの枯渇	144(34.5)	94(50.5)	50(21.6)
大気汚染, 水質汚濁	137(32.9)	40(21.5)	97(42.0)
生活騒音, 生活排水	134(32.1)	62(33.3)	72(31.2)
原生林などの自然環境の悪化	132(31.7)	44(23.7)	88(38.1)
希少な野生動物の保護・増殖	89(21.3)	40(21.5)	49(21.2)
宅地開発などによる自然の減少	78(18.7)	38(20.4)	40(17.3)
有害化学物質や農薬による環境汚染	60(14.4)	37(19.9)	23(10.0)
原子力に伴う問題	58(13.9)	29(15.6)	29(12.5)
その他	9( 2.2)	5( 2.7)	4( 1.7)
特にない	4( 1.0)	0( 0.0)	4( 1.7)

a) : ( ) 内は %, % の母数はそれぞれの n. 複数回答のため  
% の合計は 100% を超える.

表3 「容器包装リサイクル法」の認知度

生活形態	全体 n = 417	熊本 n = 186	大阪 n = 231
名前も内容も知っている	58(13.9%) <sup>a)</sup>	27(14.5%)	31(13.4%)
名前は聞いたことがあるが 内容まではわからない	189(45.3)	85(45.7)	104(45.0)
知らない	170(40.8)	74(39.8)	96(41.6)

a) : ( ) 内は %, % の母数はそれぞれの n.

### 3.2 PET ボトルのリサイクル及びPET ボトルリサイクルポリエステル繊維に対する認知度と意識

PET ボトルのリサイクル及びPET ボトルリサイクルポリエステル繊維（以後、リサイクルポリエステル繊維と略す）に対する認知度と意識を知るため、表4に示す①から⑤の項目についてきた。

#### 3.2.1 PET ボトルがリサイクルされていることの認知度

PET ボトルがリサイクルされていることの認知度について「知っている」「知らない」の2項目から回答

を得た。その結果、表4①に示すようにPET ボトルがリサイクルされていることの認知度は高く、熊本、大阪ともに90%以上を占めていた。

#### 3.2.2 PET ボトルがポリエステル繊維としてリサイクルされていることの認知度とその情報源

PET ボトルがポリエステル繊維としてリサイクルされていることの認知度について、「知っているし、製品を見たこともある」「知っているが、見たことはない」「知らない」の3項目の中から回答を得た。

表4②にみるように、全体では「知っているし、製品を見たこともある」者が最も多く、173名(41.5%)

表4 PETボトルの再利用及び再商品化についての認知度と意識

	全体 n = 417	熊本 n = 186	大阪 n = 231	地域差 <sup>b)</sup>
① PET ボトルがリサイクルされていることの認知度				
知っている	400(95.9%) <sup>a)</sup>	181(97.3%)	219(94.8%)	
知らない	15( 3.6)	5( 2.7)	10( 4.3)	
無 答	2( 0.5)	0( 0.0)	2( 0.9)	
② ポリエステル繊維としてリサイクルされていることの認知度				
知っているし、製品を見たこともある	173(41.5)	96(51.6)	77(33.3)	* *
知っているが、見たことはない	159(38.1)	57(30.7)	102(44.2)	
知らない	85(20.4)	33(17.7)	52(22.5)	
③ リサイクルポリエステル繊維製品の購入経験と着用経験				
購入経験あり、着用経験あり	59(14.1)	24(12.9)	35(15.2)	*
購入経験あり、着用経験なし	12( 2.9)	1( 0.5)	11( 4.8)	
購入経験なし、着用経験あり	23( 5.5)	9( 4.8)	14( 6.1)	
購入経験なし、着用経験なし	323(77.5)	152(81.7)	171(74.0)	
④ リサイクルポリエステル繊維製品の今後の購入意志				
購入したいと思う	62(14.9)	24(12.9)	38(16.5)	
まあ購入したいと思う	208(49.9)	104(55.9)	104(45.0)	
購入したいとは思わない	125(29.9)	53(28.5)	72(31.2)	
購入したいとは全く思わない	22( 5.3)	5( 2.7)	17( 7.4)	
⑤ リサイクルポリエステル繊維が使用されることの良否				
非常によいことだと思う	203(48.7)	87(46.8)	116(50.2)	
まあよいことだと思う	204(48.9)	98(52.7)	106(45.9)	
あまりよいことだとは思わない	5( 1.2)	1( 0.5)	4( 1.7)	
全くよいことだとは思わない	1( 0.2)	0( 0.0)	1( 0.4)	
無 答	4( 1.0)	0( 0.0)	4( 1.7)	

a) : ( ) 内は %, % の母数はそれぞれの n.

b) :  $\chi^2$  検定, \*  $p < 0.05$ , \* \*  $p < 0.01$ .

を占めた。地域別にみると、熊本学生は「知っているし、製品を見たこともある」が96名(51.6%)であったのに対し、大阪学生は77名、33.3%と低く、 $\chi^2$ 検定の結果有意な差が認められ、熊本学生の認知度が高いと判断した。「知っているし、製品を見たことがある」「知っているが、見たことはない」と回答した332名を対象として、その情報源について11項目をあげ、複数回答で回答を得た。その結果を表5に示した。表5にみるように、全体では、「テレビ、ラジオ(229名、69.0%)」「新聞(80名、24.1%)」のマスメディアが占める割合が高く、両者を合わせると309名、93.1%であった。この傾向は特に大阪学生に顕著であった。

### 3.2.3 リサイクルポリエステル繊維製品の購入経験と着用経験

リサイクルポリエステル繊維製品の購入経験と着用経験について、表4③に示す4項目の中から回答を得た。最も多かったのは「購入経験なし、着用経験な

し」であり、全体では323名(77.5%)、熊本学生、152名(81.7%)、大阪学生、171名(74%)を占めた。熊本学生は、前項3.2.2の結果にみるようにリサイクルポリエステル繊維についての認知度が高いのに比べ、購入経験・着用経験ともに低く、認知度が実行度に反映しないことが明らかになった。今後はこれらの原因について探求する必要があると判断した。

### 3.2.4 リサイクルポリエステル繊維製品の今後の購入意志及びその理由

リサイクルポリエステル繊維製品の今後の購入意志について「購入したいと思う」から「購入したいとは全く思わない」の4段階評価で調査した。表4④にみるように、全体では、「まあ、購入したいと思う」が最も多く208名(49.9%)、熊本学生、104名(55.9%)、大阪学生、104名(45.0%)であった。 $\chi^2$ 検定の結果、熊本学生及び大阪学生の購入意志に有意な差が認められた。「まあ、購入したいと思う」「購入したいと思

表5 PET ボトルリサイクルポリエステル繊維についての情報源

情報源	全体 n = 332	熊本 n = 153	大阪 n = 179
テレビ, ラジオ	229(69.0%) <sup>a)</sup>	94(51.4%)	135(74.9%)
新聞	80(24.1)	33(21.6)	47(26.3)
一般書籍	50(15.1)	30(19.6)	20(11.3)
行政による白書など	6( 1.8)	6( 3.9)	0( 0.0)
友人・知人	21( 6.3)	4( 2.6)	17( 9.5)
家族	26( 7.8)	7( 4.5)	19(10.6)
講演会などの催し	7( 2.1)	7( 4.5)	0( 0.0)
民間団体など	29( 8.7)	4( 2.6)	25(14.0)
職場, パンフレット	19( 5.7)	6( 3.9)	13( 7.3)
デパート	52(15.7)	35(22.9)	17( 9.5)
その他	56(16.9)	25(16.3)	31(17.3)

a) : ( ) 内は %, % の母数はそれぞれの n. n の数は, PET ボルトがポリエステル繊維としてリサイクルされていることを「知っている」と回答した人数.

う」を合わせると, 全体, 熊本学生, 大阪学生ともに約 70 % を占めており, リサイクルポリエステル繊維製品の今後の消費拡大が期待できると判断した.

「購入したいと思う」「まあ購入したいと思う」と回答した者を対象として, リサイクルポリエステル繊維製品を購入したい理由について, 表6に示す8項目を設定し, 複数回答で回答を得た. その結果を表6に示した. 表6にみるように, 全体では「環境保全・省資源に役立つ」が最も多く, 113名(41.9%)であった. 熊本学生も同様の傾向であったが, 大阪学生の場合は約半数の者が「価格が安そう」を第1位にあげていた. しかし, 熊本, 大阪ともに4位までに入った項目は同じ項目であり, 順位に若干の差はあるがリサイクルポリエステル繊維製品を購入したい理由は近似していた.

「購入したいとは思わない」「購入したいとは思全く思わない」と回答した者を対象としてその理由についても表7に示す8項目をあげ, 複数回答で回答を得た. その結果を表7に示した. 表7に示したように, 全体でも, 地域別でもその頻度が特に高い割合を示した項目はなかったが, 「手触りが悪そう」「耐久性がなさそう」など, リサイクルポリエステル繊維製品の品質に対するマイナスイメージの項目の出現率が高かった.

次に, リサイクルポリエステル繊維製品がこれから更に普及してきたと仮定し, 実際に購入し使ってみたリサイクルポリエステル繊維製品について表8に示す10項目の中から3つまで選択の複数回答で回答を得た. その結果を表8に示した.

表8にみるように, 全体の傾向をみると, 「カーテ

ンなど」が166名(39.8%)と最も多く, 次いで, 「バッグ, 帽子」147名(35.3%), 「スポーツ用品」137名(32.9%)の順であった. 熊本学生の場合, 順位は全体の傾向とほぼ同じであったが, 「カーテンなど」の出現率は高く, 半数を超えていた. 大阪学生の場合は全体の傾向と同じ項目が上位にランクされていたが, その頻度は近似していた. このことから, リサイクルポリエステル繊維製品は直接肌に身につけるものよりも, インテリア用品や小物などが好まれる傾向があることが推察された.

### 3.2.5 リサイクルポリエステル繊維が今後使用されることの良否

PET ボトルが繊維にリサイクルされることに対する意識を知るために, 衣料品にリサイクルポリエステル繊維が今後使用されることについて「非常に良いことだと思う」「まあ良いことだと思う」「あまり良いことだとは思わない」および「全く良いことだとは思わない」の4項目の中から回答を得た.

表4⑤に見るように, 衣料品としてリサイクルポリエステル繊維が使用されることについて, 全体の傾向を見ると, 「まあよいことだと思う」と回答した者が最も多く204名(48.9%)であった. しかし, 「非常によいことだと思う」と回答した者も203名(48.7%)を占めており, ほぼ同じ割合であった. 熊本学生, 大阪学生ともに同じ傾向であった. しかし, 前項3.2.3で述べたように, リサイクルポリエステル繊維製品を「購入したこともないし, 着用したこともない」という学生が約80%(全体323名, 77.5%)であったという結果から, リサイクルポリエステル繊維

表 6 PET ボトルリサイクル繊維製品を購入したい理由

購入したい理由	全体 n = 270	熊本 n = 128	大阪 n = 142
環境保全・省資源に役立つ	113(41.9%) <sup>a)</sup>	64(50.0%)	49(34.9%)
価格が安そう	105(38.9)	31(24.2)	74(52.1)
大差がない	80(29.6)	46(35.9)	34(23.9)
リサイクルに関心がある	72(26.7)	34(26.6)	38(26.8)
耐久性がありそう	36(13.3)	11( 8.6)	25(17.6)
手触りがよさそう	20( 7.4)	7( 5.5)	13( 9.2)
その他	15( 5.6)	11( 8.6)	4( 2.8)
清潔な感じ	11( 4.1)	0( 0.0)	11( 7.7)

a)：( ) 内は %, % の母数は「購入したい」「まあ購入したい」と回答した人数の合計。表 5, ④を参照。

表 7 PET ボトルリサイクル繊維製品を購入したくない理由

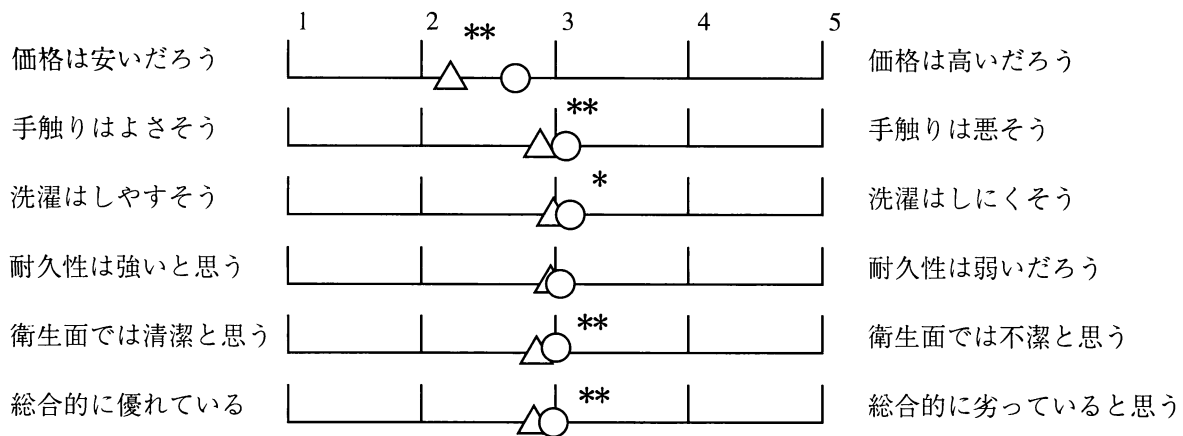
購入したくない理由	全体 n = 147	熊本 n = 58	大阪 n = 89
手触りが悪そう	38(25.9%) <sup>a)</sup>	16(27.6%)	32(36.0%)
耐久性がなさそう	36(24.5)	6(10.3)	30(33.7)
価格が高そう	29(19.7)	14(24.1)	15(16.9)
従来のポリエステルより劣っている	21(14.3)	12(20.7)	9(10.1)
不潔な感じがする	19(12.9)	4( 6.9)	15(16.9)
従来のポリエステルと大差ない	15(10.2)	7(12.1)	8( 9.0)
その他	15(10.2)	7(12.1)	8( 9.0)
生産に多くのエネルギー	3( 2.0)	1( 1.7)	2( 2.2)

a)：( ) 内は %, % の母数は「購入したいとはあまり思わない」「購入したいとは全く思わない」と回答した人数の合計。表 5, ④を参照。

表 8 購入して使ってみたい PET ボトルリサイクル繊維製品

使ってみたい製品	全体 n = 417	熊本 n = 186	大阪 n = 231
カーテンなど	166(39.8%) <sup>a)</sup>	95(51.1%)	71(30.7%)
バッグ, 帽子	147(35.3)	80(43.0)	67(29.0)
スポーツ用品	137(32.9)	56(30.1)	81(35.1)
Tシャツ	117(28.1)	50(26.9)	67(29.0)
制服	105(25.2)	40(21.5)	65(28.1)
使ってみたいとは思わない	23(5.5)	9( 4.8)	14( 6.1)
フリース	86(20.6)	43(23.1)	43(18.6)
メンズシャツ	71(17.0)	23(12.4)	48(20.8)
7 インナー	69(16.5)	21(11.3)	48(20.8)
エプロン	60(14.4)	30(16.1)	30(13.0)

a)：( ) 内は %, % の母数はそれぞれの n. n 複数回答のため % の合計は 100% を超える。



注1：1及び5，「非常に…」，3，替わらない，2，「やや…」。

注2：○ …熊本，△ …大阪。

注3：母平均の差の検定 \*\*  $p > 0.01$ ，\*  $p > 0.05$

図1 従来のポリエステル繊維製品と比較したPETボトルリサイクル繊維製品の印象

に対する学生の意識とその利用の実態には大きなずれがあると推察された。しかし、3.2.4及び3.2.5の結果から判断すると、リサイクルポリエステル繊維製品は、将来的には普及率が上がると考えられるが、そのためには意識が行動に繋がるような方策，たとえばテレビ・ラジオ，新聞等のマスメディアを活用した啓発活動も有効であると考えられる。

### 3.3 従来のバージンポリエステル繊維と比較したリサイクルポリエステル繊維に対する印象

リサイクルポリエステル繊維製品の普及を図るには、従来のバージンポリエステル繊維と比較したリサイクルポリエステル繊維に対する印象がどのようなものであるかを知る必要があると考え、従来のバージンポリエステル繊維と比較したリサイクルポリエステル繊維に対する印象について、「価格」，「手触り」，「洗濯」，「耐久性」，「衛生面」，「総合的に」の5つの視点から5段階評価を用いて調査した。すなわち、「価格」については「非常に安いだろう」「やや安いだろう」「変わらないだろう」「やや高いだろう」「非常に高いだろう」，「手触り」については「非常に良いと思う」「やや良いと思う」「変わらないと思う」「やや悪いと思う」「非常に悪いと思う」，「洗濯」については「非常にしやすそう」「ややしやすそう」「変わらないと思う」「ややしにくそう」「非常にしにくそう」，「耐久性」については「非常に強いと思う」「やや強いと思う」「変わらないと思う」「やや弱いと思う」「非常に弱いと思う」，「衛生面」については「非常に清潔と思う」「やや清潔と思う」「変わらないと思う」「やや不潔と思う」「非常に不潔と思う」，「総合的に」につい

ては「非常に優れている」「やや優れている」「変わらないと思う」「やや劣っている」「非常に劣っている」の5段階評価項目の中から回答を得た。集計方法については、順に4，3，2，1点として平均点の算出を行った。その結果を図1に示した。

図1にみるように、熊本学生及び大阪学生ともに同様の印象をもっていた。「価格」について「安いだろう」という印象がやや強いことを除くと、「手触り」，「洗濯」，「耐久性」，「衛生面」，「総合的に」については、「変わらないだろう」という印象をもっていた。地域差について、母平均の差の検定を用いて比較した結果、「耐久性」を除く他の5項目に有意な差が認められ、どの項目においても熊本学生の得点が高かった。この結果から熊本学生の方が大阪学生よりもリサイクルポリエステル繊維製品についてやや悪い印象をもっていると判断した。

## 4. 結 論

熊本大学の男女学生及び大阪に所在する大学の男女学生を対象として、1) PETボトルのリサイクル及びPETボトルリサイクルポリエステル繊維についての意識、2) PETボトルリサイクルポリエステル繊維製品の利用の実態について、質問紙調査法によるアンケート調査を実施し、PETボトルリサイクルポリエステル繊維に対する男女学生の意識とその利用の実態について分析した。主な結果は以下のとおりである。

- 1) PETボトルがリサイクルされていることは学生のほとんどが認知していた。
- 2) PETボトルがポリエステル繊維としてリサイクルさ

れていることについては「知っているし、その製品を見たことがある」と回答した者は半数に満たなかった(173名, 41.5%)。熊本学生と大阪学生との比較では、熊本学生の認知度が高かった。

3)PET ボトルリサイクルポリエステル繊維が衣料品として使用されることについては「非常によいことだと思う」「まあよいことだと思う」を合せると90%を超えていたが、今後の購入意志については「購入したいと思う」「まあ購入したいと思う」を合せても60%台であった。また、「購入したこともないし、着用したこともない」という学生が約80%(全体323名, 77.5%)であったという結果から、PET ボトルリサイクルポリエステル繊維に対する学生の意識とその利用の実態には大きなずれがあると推察された。

本調査の実施にあたりご協力いただきました追手門学院大学の辻幸恵助教授、被験者としてご協力いた

いた追手門学院大学及び熊本大学の学生みなさまにあつくお礼申し上げます。

## 5. 参考文献

- 1) 熊本日日新聞：1997年12月31日付
- 2) 厚生省：包装廃棄物 新リサイクルシステム，ぎょうせい，p16 (1994)
- 3) 山本良一：エコマテリアルのすべて，p69 (1994)
- 4) 前掲書3)：p71 (1994)
- 5) 厚生省生活衛生局水道環境部環境整備課：時代に新しい光・容器包装リサイクル法のあらまし，平成9年4月版Ⅲ
- 6) PET ボトルリサイクル推進協議会：PET ボトルリサイクル年次報告書 (2005年度版)，(2005)
- 7) 本田晶子：PET ボトルリサイクル繊維に関する研究—PET ボトルリサイクル繊維に対する大学生の意識とその利用の実態について—，平成9年度熊本大学教育学部卒業論文 (1996)